

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13325

研究課題名（和文）明治ジャーナリズム史の再構築 日報社を中心に

研究課題名（英文）Reconstructing the History of Journalism in the Meiji Era: The Case of Nippo-sha

研究代表者

岡安 儀之 (OKAYASU, Noriyuki)

東北大学・学術資源研究公開センター・協力研究員

研究者番号：50732351

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、新聞が誕生し政治文化としていかに日本の社会に定着していったのかに注目し、ジャーナリズムの歴史を解明するものである。具体的には、まだ不明な点の多い『東京日日新聞』や発行元である日報社の社員に関する研究を進め、明治期のジャーナリズム史の再検討を行った。政府擁護の立場をとったことで有名な『東京日日新聞』であったが、日本社会やジャーナリズムに与えた影響は大きかったことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、これまで不明な点が多かった『東京日日新聞』やその発行元である日報社に注目し、明治初期のジャーナリズム史の再検討を行ったことである。また、社会的意義としては、この研究を通して得られた学術的知見を、岡安儀之『「公論」の創生「国民」の誕生 福地源一郎と明治ジャーナリズム』（東北大学出版会、2020年）をはじめ、その他論文・研究報告を通じて還元できた点にあると考えている。

研究成果の概要（英文）：This research aims to elucidate the history of journalism by focusing on how newspapers were born and how they became established as a political culture in Japanese society. Specifically, we conducted research on the Tokyo Nichi Nichi newspaper, about which many aspects remain unclear, and on the employees of the newspaper that published it, Nippo-sha, and reexamined the history of journalism in the Meiji period. The Tokyo Nichi Nichi newspaper was famous for its position in support of the government, but it became clear that it had a great influence on Japanese society and journalism.

研究分野：日本思想史

キーワード：思想史 日本史 メディア史 ジャーナリズム 公論 日報社

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

大正期半ば、小野秀雄によってドイツから新聞学が導入され、日本における新聞研究が確立していく中で、宮武外骨や西田長寿、内川芳美らによって新聞の歴史的研究も進展してきた。しかし、史料整備の進んでいなかった戦前戦後の研究環境では制約も多く、活発といえない状況が長く続いた。1990年前後になり主要新聞の復刻版が出そうとともに、1992年にメディア史研究会が発足すると、日本におけるジャーナリズム史研究は活況を呈した。しかし、近年の研究動向に目を向けると、日本に新聞が誕生し、市民権を得ていく自由民権運動期までの研究は低調で、その多くは近代的国家システムが制度化された日清戦争以降のものとなっている。

また、これまでの明治初期のジャーナリズム史研究は、官権派新聞と民権派新聞、知識人向けの大新聞と庶民向けの小新聞というような二項対立的な分類を前提にしており、その間にある人的・思想的交流や、権力とメディアの表面に現れにくい微妙な関係に配慮してこなかったという問題を抱えている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、新聞という定期刊行物を通して、自由に開かれた議論を行う政治文化が近代の日本社会にどのように定着していったのかを明らかにすることである。上記の先行研究をふまえ、これまで積極的な考察対象とはされてこなかった『東京日日新聞』と、その発行元である日報社の活動に注目し、これまでにない視点からジャーナリズム史の再検討を目指した。特に、以下の問題を中心に研究を進めた。

(1) 日報社の活動に携わった人物の史資料を調査することで、日報社という組織がジャーナリズム史上で果たした役割を考える。

(2) 日報社の新聞経営に関与した人々が、もともと近世の出版業界で活動していたという点に注目し、先行研究とは異なった切り口で「公論」形成の系譜を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 日報社社員及び、日報社と関連のある人物の資料調査を行い、基礎資料など文献を収集した。研究の中心となったのは、次の史資料である。

東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫に、『東京絵入新聞』の1875年から1882年までの複写を依頼し、資料を収集した。

日報社の記者を務めた海内果(1850-1881)に関する資料調査を富山県立図書館と富山県公文書館で行い、関係する文献を収集した。

(2) 収集した『東京絵入新聞』の紙面分析を行い、目録を作成した。目録は、掲載年月日・号数・掲載記事(著者)・内容・備考に分類した。

(3) 『東京絵入新聞』と『東京日日新聞』の紙面の比較分析を行うことで、両新聞の関係性(作成側と読者側から見た関係性)について検討を行った。

(4) 富山県立図書館などで収集した郷土史家による海内果研究や富山県公文書館所蔵海内家文書の中にある日報社関係史料の分析を行った。海内は富山県の農家の五男として誕生した人物であるが、『東京日日新聞』に寄せた投書が認められ、1876年から亡くなる1881年まで『東京日日新聞』の論説記者を務めている。早世し記者としての活動期間も短かったため、これまでほぼ郷土史中心に取り上げられるのみであったが、明治前期の日報社の特徴を知る上では重要な人物である。

4. 研究成果

(1) 日報社の社長である福地源一郎『東京日日新聞』が主筆を務めた1874年から約10年間の同紙の論説記事を中心に考察を行い、その思想的意義を明らかにした。これまで福地は、『東京日日新聞』入社後、政府擁護の立場をとったことから、「御用記者」の代表格と位置付けられてきた。このような理解のために、新聞記者としての存在意義が見出されず、その研究は長らく停滞状況にあった。こうした平板な枠組みは、明治初期のジャーナリズム史研究の隘路を生み出す要因となってきた。このような問題を打破するため、福地のジャーナリストとしての活動を「公論」と「国民」の形成という視点から再評価した。

(2) 『東京日日新聞』と『東京絵入新聞』の記事を調査し、日報社の社員の動向や人的交流だけでなく読者層に関わる知見を得ることができた。両新聞はそれぞれ、代表的な大新聞と小新聞と位置づけられ、その性格も異なっている。しかし、『東京絵入新聞』の紙面には、『東京日日新聞』

をはじめ、『日新真事誌』や『郵便報知新聞』などの情報も記載されており、大新聞と小新聞の読者層が全く相容れないものではなかったことが明らかになった。

(3) 富山県公文書館所蔵の海内家文書の分析を通して、これまで不明な点の多かった日報社の実態、特に草創期の組織的特徴が明らかになった。具体的には、海内家文書にある『日報社創立証書』(明治10年)の中に、「日報社申合規則」が含まれている。現在確認のできる明治8年「日報社員約条」、明治11年「日報社申合規則 改正草案」との比較検討を通じて、企業形態の変化を解明した。例えば、明治8年の日報社においては、「平等」な関係にある社員による「協同会議」が組織運営の重要な柱であった。しかし、明治11年になると「社外」の人間も役員に選ぶことができるようになり、その方針は変化していった。また、社史によって『東京日日新聞』の特質とされた編集部門を特別視する傾向も、時期により変動があることがわかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 加藤諭, 曾根原理, 岡安儀之, 小嶋翔, 仁平政人, 杉本欣久, 伴野文亮	4. 巻 18
2. 論文標題 阿部次郎と法文学部	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東北大学史料館研究報告	6. 最初と最後の頁 67-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤諭, 曾根原理, 岡安儀之	4. 巻 19
2. 論文標題 日本初の女子大生～黒田チカから1世紀のあゆみ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東北大学史料館研究報告	6. 最初と最後の頁 101-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡安 儀之	4. 巻 188
2. 論文標題 〔書評〕茂木謙之介著『表象天皇制論講義 皇族・地域・メディア』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『文芸研究 文芸・言語・思想』	6. 最初と最後の頁 30-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡安 儀之	4. 巻 48
2. 論文標題 《書評》田中友香理『優勝劣敗 と明治国家 加藤弘之の社会進化論』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『メディア史研究』	6. 最初と最後の頁 185-194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡安 儀之	4. 巻 19
2. 論文標題 新聞の近代化と日報社	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『年報日本思想史』	6. 最初と最後の頁 42-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 岡安儀之
2. 発表標題 松谷基和氏「植民地朝鮮と東北のキリスト教系知識人」へのコメント「明治期の日本人とキリスト教」
3. 学会等名 武蔵大学東西文化融合史研究会第6回例会「キリスト教と東アジア：日欧の宗教と文化の相克・融合」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 岡安儀之
2. 発表標題 草創期の日報社に関する研究 富山県公文書館所蔵海内家文書を中心に
3. 学会等名 第8回近代日本メディア研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 岡安儀之
2. 発表標題 『東京絵入新聞』再考
3. 学会等名 第5回近代日本メディア研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡安 儀之
2. 発表標題 明治思想史におけるジャーナリズム研究の可能性
3. 学会等名 2020年度第2回日本文化講演会（岡山大学）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡安 儀之
2. 発表標題 郵便報知新聞と原敬
3. 学会等名 県博日曜講座（於岩手県立博物館）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡安儀之
2. 発表標題 新聞の近代化と日報社
3. 学会等名 東北大学日本思想史研究会 1月例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡安儀之
2. 発表標題 近代新聞の形成 福地源一郎とその周辺に注目して
3. 学会等名 東京大学東アジア藝文書院（EAA）・ジャーナリズム研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 曾根原理, 伴野文亮, 仁平政人編、共著者: 岡安儀之	4. 発行年 2024年
2. 出版社 ペリカン社	5. 総ページ数 278
3. 書名 「阿部次郎と阿部和子 父と左傾化する長女との確執を中心に」『阿部次郎ルネサンス: 研究の新天地』所収	

1. 著者名 巽由樹子, 李滉植 (翻訳: 鄭スピ), 岡安儀之, 松枝佳奈, 河崎吉紀, 前島志保	4. 発行年 2024年
2. 出版社 東京大学東アジア藝文書院	5. 総ページ数 95
3. 書名 「日報社に関する基礎的研究 富山県公文書館所蔵日報社関係史料を中心に」『EAA Booklet 34/EAA Forum 24 出版・報道文化の近代化1 「人」から読み解く』所収	

1. 著者名 長妻三佐雄, 植村和秀, 昆野伸幸, 望月詩史, 桐原健真, 小寺正敏, 岡安儀之, 田中友香理, 瀧井一博, 鈴木啓孝ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 354
3. 書名 「福澤諭吉」、「福地源一郎」『ハンドブック近代日本政治思想史 幕末から昭和まで』所収	

1. 著者名 岡安 儀之	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東北大学出版会	5. 総ページ数 215
3. 書名 「公論」の創生「国民」の誕生 福地源一郎と明治ジャーナリズム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------